

世三所
花の山 壺 阪 靈 驗 記

二九

澤市内の段・壺阪寺の段

〔解題〕西國卅三番の札所の第六番なる大和壺阪寺觀世音の靈驗記で、徳島縣教育會の「義太夫調査書」によれば、明治八年に成り、作者は加古千賀で福地櫻痴の添削となつて居る。千賀女は豊澤團平の妻女であつたが、團平はこれに作曲し、明治廿年二月十日から大阪博労町稻荷の彦六座で、大隅太夫が團平の三味線で語つて大好評を博し、爾來大隅太夫によつて度々語られていよゝ名高くなつた。正本は明治廿四年七月刊行で、校閲初代豊澤團平、著作者加古千賀と奥附にある。これを始めて歌舞伎に移したのは明治廿一年の春で、坂東篁助が大隅の淨瑠璃に刺戟された結果で、京都の四條芝居上場が最初であるといふ。

二上り頭夢が。浮世か浮世が夢か。夢て かに。長地カ、リ夫の手助け賃仕事つとちやの。ホ、ハ、ハ、オ、お里か。そふ里に。ナホスフシ住みながら。地住めば せさせてふ洗濯や。糺かひものを打鑑 なたアノおれが三味線弾くを。よい機住むなる世の中に フシよしあし曳きの の。フシ音もかすかの暮しなり。 鳴鳥 嫌に見ゆるかや。アイナア。ハテナア。大和路や。壺阪の片邊土佐明に。澤市 の聲。鐘の音さへ身に泌みて。思ひ出 おりやそんな氣ちや無いわいの。モウといふ座頭あり生れ付いたる正直の。す程。涙が先へ落ちて流るゝ妹脊の川 〳〳〳氣が詰つて〳〳。いつそ死ん琴の稽古や三味線の。糸より細き身代 を。詞オ、是は〳澤市様。今日は何 でもものけう。エ、。イヤサアノ死んでの。薄き煙の營みに。妻のお里は健や と思つてやら。三味線出して。よい機嫌 了ふ程。氣が塞いでならぬわいなう。

今のお前の一言が。私は腹が立つわいのと。口説き立てたる貞節のフシカ、リ涙の。色ぞ誠なり。始めて聞きし妻の誠。今更なんと澤市が。詫びの詞も涙聲。詞ア、コレ女房ども。何にも言はぬ堪忍してたも。誤つた。くくくわいなう。モウさうとは知らず。不具の癖に愚痴ばかり。コレ堪へてたもれとばかりにて。手を合はしたる詫び涙。フシ袖や袂を浸すらん。詞ア、コレ連添ふ女房に何の詫び。お前の疑ひ晴れたれば。私や死んでも本望ぢやわいな。イヤモウさう言うてたも程。わが身の手前面目ないわいなう。ガそれ程にまで信心してたもつても。おれが此眼はコレ。マ治りはせぬわいの。エ、ソリヤマア何を言はしやんすぞいな。この年月の憂き難難。雨の夜。雪の夜霜の夜も。厭はぬ私が耽参りも。みんなお前の爲ぢやぞえ。サア。それ程に祈誓をかけ。願うてたもつた志。有難いとも。嬉しいとも。其貞節なそなたをば。この年月の廻り根性。観音様ちやと言うたとて。罰こそあたれ何のマア。此目が明いてたまるものか。エ、何のいな。私の體はコレイナアコレ。お前の體も同じ事。そんな愚痴を言はうより。ちやつと心を取直し。観音様へ共々に。お頼み申して下さんせ。く。澤市涙にくれながら。オ、過分なぞや女房ども。詞さうそなたが一心の。据つた上は御佛の。枯れたる木にも花が咲くとやら。見えぬ此目は枯れたる木。ア、どうぞ花が咲かしたいな。と言うた所が。罪の深いこの身の重ならう。コレこんな時にはわつさり上。せめて未來を。イヤサアノ女房ども。日頃覺えの唄なりと。氣晴らしに歌も。手を引いてたもいさく。といふはんしたらどうぢやの。ム、ほんにさ

にせまるも厭ひなく。只の一度も愛想つかさず、眼かいた見えぬこの身。人なき中に。オ、さうぢや。うぢやと立上り。亂るゝ心取直し。上る段さへ四つ五つはや、曉の鐘の聲。舞イザ最期時急がんと。ナホス杖を力に。盲目の。探り。探りて漸うとる月の光に分つ夫の死骸。ハアこりやマアどうせう悲しやと。狂氣の如く身伏し前後。不覺に歎きしが。顔を上。ア、歎くまい。三年が間女房が。信心凝らして願うても。何の利益もないものを。いつ迄生きても詮ない此身。世の諺にもいふ通り。哀れなりける。女房が取つて返すも氣はそ。常に。どうぞ早う眼の明きます様。お助けねのそなたへ返禮。生き永らへていづれへなりと。よき縁附きをしてたもや。ヤ。ヤ。ム。最前聞けば。アノ坂を登りて右へ行けば。幾何丈とも知れぬ谷間との事。これ究竟の最期所。澤市様いなる。澤市様いなる。と。ア。どうせうぞいな。ア、是を思へば最前に。歌にせまるも厭ひなく。只の一度も愛想つかさず。眼かいた見えぬこの身。人なき中に。オ、さうぢや。うぢやと立上り。亂るゝ心取直し。上る段さへ四つ五つはや、曉の鐘の聲。舞イザ最期時急がんと。ナホス杖を力に。盲目の。探り。探りて漸うとる月の光に分つ夫の死骸。ハアこりやマアどうせう悲しやと。狂氣の如く身伏し前後。不覺に歎きしが。顔を上。ア、歎くまい。三年が間女房が。信心凝らして願うても。何の利益もないものを。いつ迄生きても詮ない此身。世の諺にもいふ通り。哀れなりける。女房が取つて返すも氣はそ。常に。どうぞ早う眼の明きます様。お助けねのそなたへ返禮。生き永らへていづれへなりと。よき縁附きをしてたもや。ヤ。ヤ。ム。最前聞けば。アノ坂を登りて右へ行けば。幾何丈とも知れぬ谷間との事。これ究竟の最期所。澤市様いなる。澤市様いなる。と。ア。どうせうぞいな。ア、是を思へば最前に。歌

はしやんしたアノ唄は。どうやら心に
見の此杖を。渡すは此世を去つて行く。
かゝつたが。今で思へば其時に。死ぬ
行先導き給へや南無阿彌陀佛。彌陀佛
の。聲諸共に谷間へ。落ちてはかなき
る覺悟であつたのか。エ、知らなんだ。
身の最期。フシ貞女の程こそ哀れなり。
知らなんだ。わいな。斯ういふ事な
フシ頃は二月。中空や。木フシカ、早や明
け近き雲間よりさつと輝く光明につれ
て。聞ゆる音楽の音も妙なる其中に。
さんせ。ほんに思へば此身程は
長。いとも氣高き上臈の姿を假に觀世
難うござります。有難うござります
かない者があるかない。二世と契りし
音。微妙の御聲うるはしく。いかに澤
我が夫に永い別れとなる事は。神なら
市承はれ。汝前生の業により盲目と
ぬ身の淺ましやかゝる憂目は前の世
なつたり。しかも兩人ながら。今日に
えぬ盲目の。説經。闇の死出の旅。
誰が手引をしてくれう迷はしやるの
念する功德にて。壽命を延ばし與ふべ
を見るやうで。いとしいわいのと搔口
し。此上はいよ。信心渴仰して。三
説き。口説き立て。歎く涙は。壺阪
十三所を順禮なし。佛恩報謝なし奉れ。
の。フシ谷間の。水や増さるらん。
漸。コリヤお里。澤村。と宜ふ
は谷へ落ち。死んだと思うて何にも知
う涙の顔を上げ。ア、悔むまい歎くま
御聲諸共に。かき消す如く失せ給へば
らぬ其中に。觀音様がお出でなされ。
い。皆何事も前の世の。定り事と諦
早や。晨朝の鐘の聲。フシ四方に。響き
前生の事。こまんと御知らせ。サイ
めて。夫と共に死出の旅。地急ぐは形
て明け行く空。ほの。暗き谷間に
ナア。私もお前の跡を追ひ。谷へ落ち

たに違ひはない。が身内に一つも疵^{きず}つ 禮参りは浮木の龜。始めて拜む日の光 折しも朝の。日の目を拜んで。お禮申
かず。其上お前のお眼は明く。ホ。コ は。年立返る。心地ぞや。是ぞ誠に觀 すや神や佛。萬見せ給ふはこれ偏^{ひとへ}に觀
リヤマア夢ではないかいな。ム、そん 音の。ニより觀^み御^ご利^り生^{せい}ありけるや。見え 世音。これ。偏^{ひとへ}に觀音の。誓ひの重き
なら今。澤市^{／＼}とおつしやつたが。ぬ眼も見え明らかに。有難かりける新^{あらた} の。砂^{すな}も淨土なるらん御示し有難。か
コリヤ觀音様が直々に。お呼^{よび}生^{せい}け下^{くだ}さ 玉の。年立返る如くにて。水も漏らさぬ の。砂^{すな}も淨土なるらん御示し有難。か
れましたに違ひはない。 嗚^なハ。ハ。ハ 夫婦の命も助かりけるは。誠に目出度^{めでた}りける 三^{さん}入^に御^ご法^{ぽう}なり
ハア有難や忝^{かたじけな}けなや。是より直ぐにお う候^{まち}ひける。今日は嬉^{うれ}しや杖^{つゑ}を納めて